

テレビ視聴活用法

12月もこの頃になると、新聞やテレビの報道から1年間のまとめの時期が近いことを感じるようになります。心配されたインフルエンザ(新型・季節性)も本校に於いては今、現在ほとんど流行を見ることなく、子どもたちは学校生活を元気に過ごしています。楽しみにしている冬休みはもう直ぐです。この時期は、寒い季節ということもあり、家族揃ってテレビを見る機会も多いのではないのでしょうか。そこで、今回は「テレビ視聴活用法」を紹介します。次のことばがキーワードになります。

○人は、自分に対する批判には反発する。

○人は、間接的に言われる批判は受け入れる。

具体的にどのような方法か、というと、子どもと一緒にテレビを見ながら、所々で自分の感想を挟むのだそうです。これを「つぶやき教育法」と呼びます。

例えば、ドラマ(子どもたちに人気のアニメや、洋画、時代劇、お母さん方に人気の韓国ドラマ等なんでも良いのです)を見ながら、勇気ある行動に対しては、「この主人公の生き方は素晴らしいな。」とか、卑怯な行為に対しては「人としてこんな行為は許せない。」とか。優しく気高い行為に対しては、「人ってこんなにも優しく、気高くなれるんだ。」と感嘆を。もし感動のあまり言葉にならなければ、そっと涙をふくのも良いのです。このことで、一緒に視聴している子どもにどんな効果を及ぼそうか、という次のようなことです。

人は、直接自分に向かって、「勉強しなさい」「優しくしなさい」「家のお手伝いをしなさい」「○○さんを見習いなさい」と言われるとそれがいかに正しいことでも反発の気持ちが芽生えます。

ところが、テレビドラマの登場人物の行動に対し、「いいな」「素晴らしいな」「カッコいいな」「素敵だな」「こんな生き方がしたいな」というメッセージを親が発することは、自分に対して言われたことではないので気軽に聞くことが出来ます。素直に受け止めることが出来ます。子どもは、「お母さん(お父さん)は、このような行動は良いことだ(悪いことだ)と考えている」ことが分かります。そこから、親の考え方やものの見方を自分の中に取り入れよう、とします。

子どもは、内心では親から認められたい、誉められたい、親の期待に応えるような人間になりたい、と思っています。ですが、真正面から教訓的に言われると、つい反発してしまうものなのだそうです。

この「つぶやき教育法」は、少年鑑別所で長く非行少年や少女の更生にたずさわった方がその長年の取り組みから編み出した方法です。人を裏切り、人に裏切られ、人を信ずることができなくなった鑑別所の少年・少女達。その凍りついた心を溶かし、次第に血の通う温かな人間らしい心を育てていく取り組みの中から生まれた方法だけに活用次第では大きな効果が期待できます。時間と機会がありましたらお試し下さい。

ただし失敗談もあります。以前、この方法を試し、私は娘から「お父さん、うるさいんだよ。」と言われたことがあります。そのような失敗を防ぐにはCMの時間を使ったり、CMのない放送の場合は視聴後、何気なく感想を述べるのが効果的です。寒い冬の夜は、家族みんなで炬燵(こたつ)に入りながらテレビを見るのも楽しいものです。

自尊感情を育てる

自尊感情(じそんかんじょう)ということばを聞いたことがありますか。ニュースや新聞などでよく目にします。「今の子は自尊感情が乏しい。自尊感情を育てることが大切だ。」というように使われています。どうやら自尊感情は大切なものらしい、ということが感じられます。

自尊感情が育たなくなった理由の1つは生活の変化でしょう。昔の生活では、多くの家が農業で生活していました。農家は田や畑を耕し、家ではニワトリや家畜を飼っていました。その中で、子どもにも当然、決められた大切な仕事(役割)がありました。ニワトリに餌をやったり卵を取り出すこと、やぎの餌である草を刈り集めること。これらは子どもの大切な仕事でした。当時の農家では子ども達も貴重な労働力でした。与えられた仕事を通し、子ども心にも「私も家の大切な役割を担っている。」という意識を自然に持つことができました。簡単に言うと、「自分の存在が家や社会に役立っている」という思いが自尊感情の芽生えといえます。

本校の先生方と面談したり、学級の様子を見聞きすると、学級(主に低学年)で、次のような取り組みをしているようです。帰りの会などで、その日にあった出来事で友だちの良い所を見つけて発表するという取り組みです。「今日、〇〇さんが、困っている私に〇〇〇をしてくれました。とても嬉しかったです。」というようなものです。(友だちの良いところを見つけ)

担任の先生は、このような取り組みを通し、クラスの中に優しい気持ちを育てたい、という思いがあります。それと共に、友だちから、「親切にしてもらって嬉しかった。」と言われた子は、「私は人のために役立っている。」と思うようになります。これを自己肯定感といいます。自分の存在を肯定すること、私はこのクラスでみんなから信頼され必要とされている、と思うこと。この自己肯定感と自尊感情は、ほとんど同じものなのでしょう。

児童会で行われている縦割り遊び(今月の16日にも北小ウォークラリーが計画されています)では、学年をこえた異年齢集団で活動します。低学年児童は高学年のお兄さん、お姉さんと一緒に活動し、その活動の中から集団の一員としての意識が育っていきます。また、大きくなったらあのような6年生になりたい、というあこがれを抱きます。高学年児童は、年下の子を指導する中で、自分は周りから頼りにされている、自分はこの集団のリーダーなのだ、という確かな存在感を持ちます。昔に比べ、各家庭の子ども数が少なくなっている今日、このような異年齢集団での活動は貴重な体験学習の場、といえます。

子ども達は、学校に通うことで様々なことを学びます。目に見える形では、読み書き計算の能力の向上でしょう。体も大きくなり体力もつきます。それと共に、はっきりと目に見える形ではないのですが、自己肯定感や自尊感情なども学校生活の中で養われていきます。

では家庭で、自尊感情や自己肯定感を育てるにはどうしたら良いのでしょうか。それには、子どもの力に応じた家庭の仕事を与え、その役割を担わせることで、「私は(ぼく)は家族の一員なのだ。1つの仕事を担っているのだ」という意識を育てることでしょう。そして、時には、「〇〇が、いつもお風呂掃除をしてくれるから大助かりだよ。」とか「〇〇が炊いてくれたご飯、とてもおいしいよ。」とその役割を認めてあげることでしよう。そのことで、自尊感情ばかりでなく、仕事に対する責任感も養われます。

確かに、子どもにやらせるより、大人が自分でやってしまった方が、丁寧で速く楽かもしれません。しかし、家庭で決めた仕事をする、させることは、ある意味では、国語の漢字を覚えたり、算数の計算力を磨くことよりも、その子が人間として生きていく力をつける上で大切なことかもしれません。

